

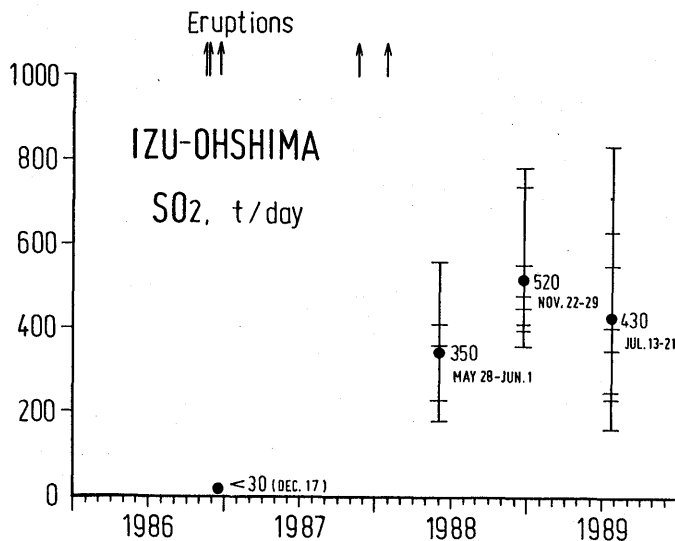
伊豆大島火山における二酸化イオウ 放出量の推移 (1986~1989年)*

九州大学理学部付属
島原地震火山観測所

伊豆大島火山の1986年噴火後、2年8箇月が経過したが、依然として微動の発生が認められている。

この間の噴煙活動は、当初1年間は、噴火時を除いては低調であったが、1987年11月16~19日の噴火活動による山頂火口開孔以後に活発化した。気象庁大島測候所の観測結果による噴煙最高高度の推移をみる限りでは、1988年11月~1989年2月を最高に、その後若干低下傾向を示していたものの、噴煙量は多量を持続している。

第1図に、相関スペクトロメータ (COSPEC) によって測定された、山頂火口からの二酸化イオウ放出量の推移を示す。1987年11月16日以前は、本装置による検出限界 (約30t/日) 以下であったが、1988年5月28日~6月1日の測定結果は、平均値としては350t/日であった。その後、11月22~29日間には500t/日レベルに増加、翌1989年11月13~21日間には若干低下したものの、依然として高い放出レベルを持続している。



第1図 伊豆大島火山山頂火口からの二酸化イオウ放出量の推移

Fig. 1 Variations of emission rates of sulfur dioxide from the summit crater of Izu-Ohshima Volcano.

Each point represents the daily mean values on each measuring period, and each lateral short bars indicates the daily values.

* Received Dec.25,1989